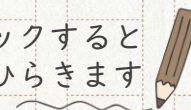




令和8年度 教員おすすめの本



イラストをクリックすると
本の詳細画面がひらきます



福岡大学図書館
Fukuoka University Library

人文学部

渡部 智也先生

アクロイド殺し
アガサ・クリスティー著；羽田詩津子訳

多くの読者を楽しませる人気のある文学ジャンルの1つに、「探偵小説」というものがあります。ミステリや推理小説、といった呼ばれ方をするのもある一大ジャンルです(これらは厳密には異なるのですが、長くなるのでここではその話はやめておきます)。このジャンルにおける最初の作品は、1841年にアメリカの作家エドガー・アラン・ポーが書いた「モルグ街の殺人」だと言われています。一方で本格的に花開いたのは、20世紀前半に訪れた、俗に「探偵小説の黄金時代」と呼ばれる20年だと考えられています。この時期の作品の根底に流れているのは、「探偵小説とは、フェアプレイの精神に基づく読者と作者の知的遊戯だ」という考え方でした。要は、いかに作者は嘘をつかずに読者をだまし、読者はその作者の罠をかいくぐるか、そのせめぎ合いにこそ探偵小説の面白さがあるのです。そして作者がもっとも直接的に読者をだまそうとする試みが、「叙述トリック」と呼ばれる手法です。この手法は端的に言えば、文章表現という小説の特性を生かして、読者の思いこみや錯覚を誘発し、意識を誤った方向に向けさせるというトリックです。このトリックを生かした黄金時代の代表作が、ミステリの女王の異名を持つアガサ・クリスティーによる『アクロイド殺し』です。地方の名士であるアクロイド氏が何者かに殺害され、姉とともにその地で暮らしていたシェパード医師が、隣に引っ越してきた名探偵のエルキュール・ポワロとともに事件解決に乗り出す、という物語です。この概要説明だけを読むと、いったいなにが叙述トリックなのか、と思われるかもしれませんが、これ以上の説明は作品の根幹にふれるため、完全な野暮と言うものでしょう。まず、なにも見ずに、ただ読んでください。そして、読み終わったら、もう一度答え合わせとして読み直してください。間違っても、どういう作品か事前にネットで調べてみよう、などと考えるはいけません。そのようなことをすれば、人生の大きな損失です。

渡部 智也先生

葉桜の季節に君を想うということ
歌野晶午著

「叙述トリック」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？叙述トリックとは、いわゆる探偵小説のトリックの1つであり、作品世界の中でおこなわれる探偵と犯人の駆け引きではなく、文字表現という特性を生かして読者の錯覚や思い違いを引き起こし、その意識を誤った方向へと向けさせようとする、作者が読者に対して直接仕掛ける罠のことです。よほど下手な作家でもない限り(というと失礼ですが)、多くの読者はだまされ、驚かされることになるため、様々な作家が活用して面白い作品を書いています。しかし、叙述トリックには大きな弱点があります。それは、叙述トリックだとわかった段階で読者は警戒しながら読むことになってしまうため、その驚きも面白さも半減してしまうのです。とはいえ、何事にも例外はあります。世の中には、叙述トリックの作品だとわかっていても、そのトリックがあまりに意外なものであるため、例外なく驚かされてしまうような作品があります。それがこの、歌野晶午氏の代表作『葉桜の季節に君を想うということ』です。元私立探偵の主人公が、悪質な靈感商法を巡る事件に巻き込まれていく、という、言葉で説明すれば実に簡単な物語ですが、そこにすでに作者の罠が潜んでいます。是非、事前情報を入れずに読んでみてください。なおその際、ネット検索や、Amazonのレビューを読むことは厳に謹んでください。取り返しのつかない損をすることになります。

山根 直生先生

中国TikTok民俗学：スマホからはじまる珍神探訪
大谷亨著

2000年代から10年代にかけて、我々日本人研究者にとって中国の現地調査は、困難・苦労は多々あるものとても自由で実り多いものでした。今やそうはいかない…と思っていたら、若い研究者の中にはなおも果敢に挑んでいる人がいるのだと再認識させられた本です。そのバイタリティと、珍道中旅行記のような独特のユーモアが実に面白い。同著者による少し専門的な『中国の死神』(書弓社、2023年)も入れてもらったので、あわせて読むことをお勧めします。

山根 直生先生

中国の死神
大谷亨著

表題通り中国の死神、「無情」を追った一冊です。白無情と黒無情、ノッポとチビのコンビが基本で、中国道教の宗教施設「廟」に祀られているという——こう書くだけだとまったくお堅い歴史・民俗学研究書に思えますが、決してそれだけではありません。監視社会だの反日国家だの言われる現代中国を自在に見て歩き、珍道中も独特のユーモアで語ってくれる著者による、地下鉄で読むと少々困るほど笑ってしまう内容でした。全編カラーの装丁も現地の空気を伝えてくれます。まずは手に取ってみてください。

人文学部



中越 亜理紗先生

批評理論入門：『フランケンシュタイン』解剖講義 廣野由美子著

文学作品についてレポートや論文を書こうとしたものの、あらすじの要約に終始してしまったり、感想の羅列になってしまったりした経験はないでしょうか。では、作品を「分析する」とは一体どういうことなのでしょう。本書は、そうした疑問に応える、初心者にもわかりやすい小説技法と批評理論の入門書です。

前半では、語り手、焦点化、アイロニー、声、反復、間テクスト性、メタフィクションなどといった、小説を読むための技法が解説されます。後半では、脱構築批評、精神分析批評、フェミニズム批評、ジェンダー批評、文化批評、ポストコロニアル批評など、主要な批評理論が紹介され、理論的読解への入り口が示されます。

作品分析の実践例として取り上げられているのは、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』です。原作を完全に読了していなくても大丈夫(もっとも、「フランケンシュタイン」が怪物の名前ではなく博士の名前である、という基本的な点は押さえておきたいところです)!本書では、出来事を時間順に並べた「ストーリー」と、語りの順序に沿って再構成された「プロット」が明確に区別されて紹介されており、混同されがちなこの二つの概念についても丁寧な説明がなされています。

本書を通じて、『フランケンシュタイン』という作品がいかに関多様な読みの可能性に開かれているかが分かるでしょう。その過程で、自分一人の読書では見落としていたテーマや論点に気づかされるはず(その意味でも、ぜひ原書にもあらためて向き合ってみてほしいと思います)。また、参考文献リストも有益で、関心をもった分野をさらに深く学ぶための出発点として活用できます。本書で身につけた分析の視点は、ご自分が好きな文学作品にも応用可能です。ただし同時に、分析の手法が型にはまり、機械的になってしまう危険性もあります。理論を道具として使いつつも、そこからこぼれ落ちるもの、あるいはその先にあるものを大切にする姿勢も、各自が忘れずに持ち続けてほしいと私は考えています。

法学部



山下 慎一先生

王とサーカス 米澤穂信著

読後感を決してすっきりしたものではないかもしれませんが、読んでよかったと思う本です。知らず知らずのうちに傲慢になっている我が身に気づきます。話の運び方などはやはり完璧で、読ませられます。



山下 慎一先生

君のクイズ 小川哲著

「どう考えてもあり得ない!」と思われることを、緻密な論の運びによって「うーん、あり得る!」に変えてしまう、魔法のような小説でした。最高に練り上げられた論理と魔法は、じつは紙一重だと感じます。こういう文章を書けるようになりたいです。



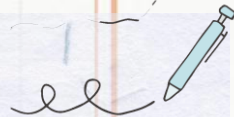
山下 慎一先生

憲法 樋口陽一著

法学に関する学術書として、本当に最高峰だと思います。私自身は、大学2年生の時に読んで、1回目は全く意味が分かりませんでした。2回目にぼんやり分かり、3回目にやっと半分くらい分かりました。いま40歳を超えて、やっと全体がほぼ分かるようになり、あまりの完成度に圧倒されています。「憲法」の神髄に触れたい方は、是非チャレンジしてほしいです。

山下 慎一先生

現代生活独習ノート 津村記久子著



何かに追われるような気忙しい日常を送っているあなたに、是非読んでほしいと思います。「なんで自分はこんなにあせってるんだっけ?」という気分になります(だからと言ってなかなか今の生活から「降りる」ことは難しいのですが)。



山下 慎一先生

社会保障のトリセツ：医療年金介護労災失業障がい子育て生活保護困ったときに役所の窓口を持っていく本 山下 慎一著

各方面で大人気の『社会保障のトリセツ』、待望の第2版です!公務員を目指している皆さん、就職前に是非一度この本に目を通してみてください。将来必ず仕事で役に立ちますよ!それ以外の皆さん、生まれてから天寿を全うするまでの間に、必ずこの本が生活を助けてくれる場面がありますよ!まず図書館で借りて、卒業後に購入されることをお勧めします。著者より。



山下 慎一先生

社会保障法 黒田有志弥著

複雑で分かりにくい社会保障法の全体像を、ざっくり「つかむ」にはもってこいの本です。執筆陣も一流で、信頼できます。

法学部

山下 慎一先生

社会保障法
笠木映里著

複雑で分かりにくい社会保障法の全体像をざっくり「つかむ」ことができたなら、だんだん、細かい点について「なんでそうなっているんだろう？」と疑問がわいてきます。そのようなたくさんの疑問に、しっかりとした論理の手間と文字数をかけて答えてくれる基本書です。「分かりやすい本」とは、必ずしも「ページ数の少ない本」ではないということを教えてください。



山下 慎一先生

滝山コミュニケーション一九七四
原武史著

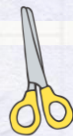
「日本」というくくりで特定の「時代」を感じることもできるし、読者自身の生まれ育った「町」や育った環境を思い起こすこともできます。評価の高いノンフィクション作品ですが、とてもスリリングな小説のように楽しめました



山下 慎一先生

母親になって後悔してる
オルナ・ドーナト著 鹿田昌美訳

この図書館にもはいている、「母親になって後悔してる、といえたなら：語りはじめた日本の女性たち / 高橋歩唯, 依田真由美著」の基となった本です。すべての母親・父親、そしてこれから母親・父親になる人、誰かの子供であった人、あるいは「誰かに母親の役割を担わせる人」が読むべき本だと感じます(結局全人類ですね)。



山下 慎一先生

母親になって後悔してる、といえたなら
：語りはじめた日本の女性たち
高橋歩唯, 依田真由美著

この図書館にもはいている、「母親になって後悔してる / オルナ・ドーナト著；鹿田昌美訳」の日本版です。現在母親である人、父親である人、そして将来母親・父親になる人に是非読んでほしいです。そして、いま読まなくとも、将来、子育てをつらいと感じたときに、このような本があることを思い出してほしいと思います。



経済学部

秋本 清香先生

18歳までに子どもにみせたい映画100
有坂墨著

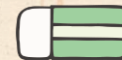
“18歳までに～”とありますが、年齢に関係なく、なに映画を観たいときに役立つ一冊です。「学校をズル休みした日に観る映画」や「落ち込んだとき/上手くいかないとき」、「大人ってサイコー!」など、25のテーマに沿って、100以上の映画が紹介されています。個人的には、いろいろなエピソードが時を越えて繋がる『フィッシュストーリー』、夏の暑い日にクーラーのない部屋で観たくなる大学生のゆるい青春『サマータイムマシン・ブルース』、あまりに重い母の愛に怖くなる『母なる証明』がおすすめです。



秋本 清香先生

本を読む人はうまくいく
長倉顕太

「読書するかしないかで、人生に大きな差が出てしまう」とこの本には書かれています。“それはなんとなく分かるけど…”という人は一度手に取ってみてください。なぜ本を読む人はうまくいくのかだけでなく、「本を読む人」になるにはどうすればよいのかも書かれています。じっくり読もうと思わず、とりあえずページをぱらぱらとめくるだけで良いです。読んだ後、今年はもう少し図書館に通ってみようかなという気持ちになると思います。



野澤 亘先生

アサーション入門：自分も相手も大切に自己表現法
平木典子著

友人に「それはやめてほしい」をどう伝えるか。アルバイト先で「今回は引き受けられません」と断るとき、角が立たない言い方はあるのか。私たちは日常のあちこちで、自分の都合や気持ちを言葉にする場面に出会います。強く出れば相手を押し切ってしまう、遠慮しすぎれば自分が消耗する——その間で揺れる状況は少なくありません。平木典子『アサーション入門——自分も相手も大切に自己表現法』は、そうした「言う/言えない」の問題を、自他を尊重する表現によって解決するための入門書です。就活の面接やゼミでの発言、就職後の依頼・調整・断り方といったキャリア場面でも、友人や家族との関係でも、相手を否定せずに境界線を示すための考え方や具体的な言い回しのヒントが得られます。“自分らしく”と“協調”を両立させたいみなさんにとって、個人主義の現代を生きるための良いガイドになると思います。



経済学部

山崎 好裕先生



おくのほそ道 芭蕉著

昔私は東京大学学生俳句会の部長だった。実は現在も俳人協会会員であり俳人としても活動している。俳句と言えば松尾芭蕉が有名であるが、芭蕉のころは五七五の短詩を俳諧と呼んでいた。俳諧とは滑稽という意味である。芭蕉と言えば古典であり真面目腐ったイメージがあるかもしれないが、芭蕉の俳句にもやはり庶民派としての親しみやすさや発見の驚きが含まれていて俳諧の正統としての側面は色濃いと私は思っている。旅を好んだ芭蕉は五つの紀行文を残した。順に『野ざらし紀行』、『鹿島詣』、『笈の小文』、『更科紀行』、『おくのほそ道』であるが、最後の『おくのほそ道』において芭蕉らしさは完成の域に達した。芭蕉は旅から戻った後の元禄3年睦月2日の弟子・山本荷兮宛の手紙で「四国の山ぶみ、つくしの船路、いまだ心不定候」と書いた。しかし、元禄7年神無月12日、大坂の貸座敷で弟子たちに囲まれて息を引き取った。だから、西日本への旅は結局実現しなかった。芭蕉の享年は満年齢で49歳。たまたま夏目漱石と同じ享年だがまだ若いと言えば若い。だから、俳句と芭蕉を愛する私は、大坂で病の床から奇跡的に回復し翌年の春から冬まで四国と九州を旅して山陽を通して戻る芭蕉の話を考えて。そして、芭蕉に成り代わって俳句入りの紀行文を完成させたのである。名付けて『西国紀行』。『おくのほそ道』へのオマージュをふんだんに盛り込んだ芭蕉愛溢れる作品である。「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」は芭蕉の辞世の句と言われている。私はこの句を受けて芭蕉に夢の旅路を踏ませたいと思ったのだ。まだ出版予定は無いので私の行う市民向け講座で受講者に配ろうと思っている。ところで、芭蕉は私生活においてストイックであった。正式に妻を娶っていないしおそらく子どももない。晩年の芭蕉の庵には寿貞尼という女性がいた。この尼僧には次郎兵衛という息子がいて母親が死んだ後は下男として芭蕉の生活の世話をしていた。しかし、俳句は詠まない男であったので芭蕉と血が繋がっていないと思う。沢山の作品を残し蕉門と称される多くの弟子を育てた芭蕉にとって、作品や弟子こそ血の繋がった子どもたちのようなものだったのだろう。

山崎 好裕先生

草枕・二百十日 夏目漱石著



2025年度下半期のNHK朝ドラ「ばけばけ」で外国人教師へブンのモデルとなった小泉八雲の経歴を夏目漱石は驚くほど忠実になぞっている。八雲が第五高等学校の英語教師から東京帝国大学の英文科講師に転任するとそこに漱石が後釜としてやって来るのである。漱石の小説のうち「草枕」と「二百十日」は熊本滞在自体の経験を元にした作品だ。熊本県玉名市にはこのうち「草枕」についての展示をしている草枕交流館という施設がある。自身が小説家でもある私はここで「草枕」について講演することになり、その準備として同作品について三つの論文を執筆した。最初の論文で書いたのは、二つの小説が滑稽な戯作文学のような体裁を持っているのとは裏腹に、近代小説としての構造をしっかり有しているということだった。さて、八雲が東京帝国大学英文科の講師を辞職するとまたしても代わりに漱石が就任する。漱石は熊本からイギリスに留学に行き英語教授法を学んでいたのである。ただ、東京帝国大学での教員生活は漱石にとってストレスが多いもので、漱石は精神的に参ってしまふ。「草枕」と「二百十日」は在職中に雑誌に発表された。その後東京帝国大学を辞して朝日新聞社に入社した漱石は、小説家に専念する道を歩み始める。私の2本目の論文で書いたのだが、ノーベル文学賞を受賞した川端康成の「伊豆の踊子」は「草枕」を下敷きにした小説である。さらに、戦後の大衆小説で大活躍した松本清張には「天城越え」という作品があるが、これは「伊豆の踊子」を批判的に換骨奪胎して執筆されている。私の2本目の論文では、「草枕」、「伊豆の踊子」、「天城越え」という3作品について総合的に分析を行った。私の論文の3作目では、漱石が「草枕」に忍ばせた暗号を読み解いている。無論「草枕」が暗号を含んでいるなどこれまで誰も気付いていなかった。「草枕」のヒロイン那美には前田卓という実在のモデルがいる。彼女は後年東京に出て孫文ら中国人革命家の支援をする。漱石はそのことを知って「草枕」を書き直さなければと言ったというが、もちろんこれはリップサービス。小説世界の那美は既に実在の卓とは別な人格として役目を与えられているのだ。

野澤 亘先生



世界一楽しい決算書の読み方

会計クイズを解くだけで財務3表がわかる

大手町のランダムウォーカー著

財務諸表を勉強しはじめたころ、「数字そのものではなく、背後の企業活動を読み」と何度も言われました。当時の私はずっと、(どうやって?)とっていました。売上高6000億円、営業利益500億円、総資産9000億円、だから何?そんなふうに感じている人がいるとしたら、本書は合うと思います。

『会計クイズを解くだけで財務3表がわかる』は、クイズと対話形式でテンポよく進み、気づけば「この会社はなぜこの負債が大きいのか」「投資が増えているのに現金が減るのはなぜか」と、数字から“理由”を探す癖がついていきます。実際の企業の数字を使ったクイズで、企業のおこなうビジネスの特徴と、財務諸表の数字の結びつきが明確にわかります。

就活やインターンの企業研究では、ニュースの決算を一段深く読めるようになり、面接でも“会社の稼ぎ方”を自分の言葉で語れるようになります。学問的にも、会計を「企業行動の結果が記録されたデータ」として捉える視点は、企業金融や産業組織、ガバナンスの議論へ自然につながります。最初の一冊として、これ以上に軽やかで実践的な入門は多くないと思います。

経済学部

山崎 好裕先生

ファスト&スロー：あなたの意思はどのように決まるか？
ダニエル・カーネマン著；村井章子訳

社会科学の分野でノーベル賞が設けられているのは経済学一つだけである。だが、経済学と言えどお金の話だけだと思っていたらそれは大間違い。私に言わせれば数学や統計学を使って人間行動や人間社会を分析していればその研究は経済学に属する。だから、ノーベル経済学賞の受賞者もその学者としての肩書は多岐に渡っている。2002年のノーベル経済学賞はダニエル・カーネマンとヴァーノン・スミスに贈られた。ヴァーノン・スミスは経済学者であって実験経済学という分野を切り開いた。カーネマンも行動経済学という分野を創始したから、その当時目新しかった分野を纏めて受賞させたという感も否めない。確認しておきたいのはカーネマンがいわゆる経済学者ではなく心理学者であったということだ。本書のなかで著者のカーネマンは親友で共同研究者のエイモス・トヴェルスキーとの出会いを語っている。カーネマンはイェルサレム・ヘブライ大学の同僚として天才肌のトヴェルスキーと知り合ったのだ。二人は18世紀の数学者ダニエル・ベルヌーイが持っている富が同じであれば幸福感は同じはずだと言ったことが間違いであるという点で意気投合した。ジャックとジルが共に500万ダカット持っていたとしても、ジャックが以前は貧しくてジルが以前もっと豊かだったとすれば明らかにジャックの方が幸福なはずだからだ。本書のタイトルになっているファスト&スローは、心理学者であるカーネマンが考える人間行動に心理が与える影響の二つのパターンを示している。ファストは素早く直感的な判断であり、スローは冷静で論理的な判断である。カーネマンが言っているのはファストの方が我々の行動をスローより強く支配しているということだ。経済学者の私にとっては本書の叙述は冗長でつまらないものだった。だから、ツヴェルスキーとカーネマンの2本の共著論文がしっかりと経済理論の体裁を取っていることにはツヴァースキーの貢献が大きかったはずだと思う。

彼らの理論では株で100万円儲けた場合の喜びよりも100万円失った場合の痛手の方が遥かに大きいとしている。また、人は小さい確率を実際よりも大きめに、大きい確率を実際よりも小さめに評価するとした。

商学部

滝沢 凜先生

フィッシュストーリー
伊坂幸太郎著

学生にとって、「経済学」や「商学」は、何か漠然とした取っ付きづらいもののように思えるかもしれません。しかし、少し立ち止まって経済活動を観察してみると、「風が吹けば桶屋が儲かる」という言葉に象徴されるような、因果の連鎖が見えてきます。大学の講義に登場する「経済波及効果」や「バリューチェーン」といった専門用語は、ある一点で起きた変化が、一見無関係に見える遠くの場所にまで影響を及ぼしていくプロセスを、学術的な視点で捉えたものです。

この目には見えない因果の連鎖を物語として体験させてくれるのが、伊坂幸太郎の『フィッシュストーリー』です。本作は、売れないロックバンドの最後に残したレコーディング曲が、未来に届いて世界を救うまでを描く短編小説です。伊坂幸太郎は、「風が吹けば桶屋が儲かる」という構造を、情景的に描写しています。この小説を読んだ後、きっと日常生活において「風が吹けば桶屋が儲かる」という概念を意識したくなるでしょう。

例えば、大学での学びや、日々の些細な選択までもが、未来の誰かの運命を大きく変えているかもしれない。そんな因果の連鎖に興味を持った時、「経済学」や「商学」はもっと血の通った、親しみやすいものへと姿を変えるはずだ。

大上 麻海先生

ケアするのは誰か？：新しい民主主義のかたちへ
ジョアン・C・トロント著

「ケア」という言葉が2020年代の重要語句になっている。発展や革新という言葉に疲れ果てた2020年代の世界が必要とするのが「ケア」である。「ケア」とはいったい何だろうか？看護師や介護士になる人が学ぶことだろうか、それとも親になる人に必要な言葉だろうか？実はそれだけではなく国家や企業が行うことでもある。「責任」や「正義」と近い言葉でもある。人が人と関わり合いながら、社会を維持させ、継続させ、修復するために行う全ての行為がケアだと著者のトロントは述べている。より具体的に言うと、生きていく上で困り事のある人に対して関心を向け、配慮し、実際に面倒をみるのがケアである。しかしそれだけではケアは続いていかない。そのケアがよかったのか、十分だったのか、的外れでなかったか、そういうことが分からなければ次のケアに活かせない。だからケアの中には、ケアを受けた人からのフィードバック(=応答責任)も含まれている。そうして困り事のある人を支え、社会を維持させるのである。実は今、企業にもこれが求められている。企業が従業員ひとりひとりに関心を向け、配慮し、面倒を見る。従業員はそれに対してフィードバックを返す。ひとりひとり困り事は異なるので、ケア施策はその人ごとにカスタマイズされたものになる。平等を重視して全員一律の施策を実施することに腐心してきた企業にとって、カスタマイズされたケアを個別に行うのはコストのかかる挑戦である。けれど人口減少の進む日本においてひとりひとりの従業員を大切にしない企業は人手不足に喘ぐことになるから、組織ケアに舵を切ることになる。日本企業が伝統的に行ってきた「人を大切にして長く勤めてもらう人事施策」が消え去ってから数十年経ったが、2020年に入った今、それが復興する兆しが見えている。

商学部

岡 陽子先生

コード・グレー

救命救急医がみた医療の限界と不確実性
ファーゾン・A・ナーヴィ [著]



物語は救急車で搬送されてきた一人の女性患者への対応を軸に展開していく。救命救急の現場で交錯するさまざまな人間模様の描写は、まるで映画を観ているかのような臨場感に満ちており、読者を一気に物語へ引き込む。驚くべきことに、本書はある救命救急医のメモワールであり、すべてが事実に基づくノンフィクションである。その点もまたこの本を特別な一冊にしている。著者はコミュニケーションを重んじ、チームの仲間を尊敬し、ワークライフバランスなど望めない環境の中で働いている。システムに対する不満は山ほどあってもおかしくない。しかしそれを言い訳にすることなく、自分にできることを精一杯やり抜こうとする姿勢からは、謙虚で心優しく、同時に芯の強い「理想のリーダー像」が浮かび上がる。その一方で、その「理想」のリーダーが内に抱える、外からはうかがい知れない葛藤は、たとえ職種が異なっていたとしても、これから社会に出ていく学生のみなさんに確かな勇気を与えるであろう。搬送時点で死亡していることが明らかな患者に対し、著者はその事実を即座に家族へ告げるのではなく、あえて蘇生処置を行う場面を「見せる」という判断を下す。医療チームを一つの「舞台」で演じる役者に、そして自らをオーケストラの指揮者になぞらえながら、決して成功しないと分かっている行為を遂行する。その判断に対し、チームの誰一人として異を唱えることなく、手を抜かず、汗だくになりながら、淡々とその「役」を全うする。その光景には、やるせなさと同時に、医療者としての責任の重さがにじみ出ている。それは、残された家族に対する医師としての義務であると信じるがゆえの選択であり、その狭間には、「医療」という巨大なシステムに内在する不条理や不公平さが横たわっている。生きたいと強く願う者と、生きることを諦めている者。しかし救命救急

の現場では、「命」は等しく扱われ、「すべて」を救うための努力を尽くさなければならないという不文律が存在する。誰を、どのように救うのか。そもそも「命を救う」とは、いったい何を意味するのか。人の生死に関わる意思決定は、医療従事者の間で共有される明確な「コード」、すなわち「ブルー」や「レッド」のように単純に色分けできるものではない。そこにあるのは常にグレー。まさに「コード・グレー」と呼ぶべき領域なのであろう。

藤田 裕邦先生

世界の名前
岩波書店辞典編集部編。



今から30年余り前、東京で、男の子に「悪魔」と名付けた出生届が出されたものの、人の名前として不適切だとして市役所が受理しなかったことがありました。この時、ある言語学者が、外国には「悪魔」やそれに類する言葉が個人名として定着している民族が存在することを指摘しています。また、現代日本の法制度では名前は「姓」「名」の2つの要素から成り立つとされており、いずれかを欠いたり他の要素を加えたりすることはできませんが、名前の構成要素がこれとは異なる社会もあります。このように、世界には多様な名前が見られますが、それを紹介しているのがこの図書です。

『岩波新書』のひとつとして刊行された本書には、世界の名前に関する100本のエッセイが収録されています。各エッセイの分量は2ページ余り程度、執筆者の専門分野は、言語学の他に歴史学、文学、人類学など、さまざまです。テーマも、国や地域(ドイツ、チベット、バルカン半島、など)、言語(ポルトガル語、ウイグル語、ベンガル語、など)、特定の文化的・社会的シーン(インド神話、中世フランス文学、ローマ教皇、など)と多岐にわたります。また、本書は、名前そのものの知識をもたらしてくれるだけではなく、オランダ・イギリスを旧宗主国とする南アフリカ共和国の白人住民にフラン

ス語系の名前が多いという意外な事実や、フランコ政権下のスペインでのカタルーニャ語による名乗りを禁じた文化弾圧など、名前のあり方からその国や社会の状況を読み取ることも教えてくれます。世界のいろいろな名前を扱っている本書ですが、「日本」の領土とされる地域についてはアイヌ語と琉球語に触れているだけで、いわゆる「日本人の名前」に関するエッセイは入っていません。それについては皆さんも多くの事例を知っているでしょうから、本書を参考に自分で書いてみるのも一興でしょう。

田中 義孝先生

Grow the pie パーパスと利益の二項対立を超えて、持続可能な経済を実現する
アレックス・エドマンズ著；川口大輔，霜山元，長曾崇志訳



現代の社会において、私たちは健康問題、労働環境、気候変動などの社会的な課題と無関係に生活していくことは難しい。こうした中で、企業が社会問題の解決に対して責任を負うべきだという議論がしばしばなされる。企業の利益追求が社会を犠牲にする、あるいは逆に企業が社会貢献すると利益が減少するといったように、社会の利益と企業や投資家の利益を対立的にとらえる考え方は根強い。この本はそのような見方に疑問を投げかけ、ビジネスにこそ社会を改善する力があることに注目している。

著者のエドマンズ氏はロンドンビジネススクールの教授で、ファイナンス分野で多くの業績を残している研究者である。この本では、企業が社会のために生み出す価値を一つのパイと見なし、企業が従業員や地域社会、地球環境といった自社のビジネスとかわる存在に広い意味で投資をすることによって、そのパイを拡大するという考え方が示されている。このように社会に価値を生み出すことを通じて自社の利益を拡大するビジネスの進め方という切り口から、これからの時代における経営者、投

資家、従業員など企業の関係者の役割を考えるというのがこの本に共通するテーマである。

この本では、パイの拡大に取り組み、結果として成長を遂げた企業の事例が数多く紹介されている。興味深い事例が多い一方で、そのような自らの主張を際立たせるエピソードのみを軸にした説明の危うさについて著者自身が文中で警鐘を鳴らしている。事例だけではなく、著者自身の研究を含む数多くのデータをもとにした客観的なアプローチによる議論の重要性を説いている点も本書の特徴の一つである。現代社会におけるビジネスの役割を、経営や金融といった学問の視点から問い直すという点で、大学で学ぶ学生の皆さんにお薦めの本である。

